

<夏休みの宿題>

『東京の景観を考える』

- ・好きな（美しい）街並み
- ・嫌いな（醜い）街並み
- ・無関心な（興味のもてない）街並み

以上3点に該当する写真を、計15点提出すること

（各項目の点数は自由。ただし、それぞれの項目、最低2点は提出のこと）

<提出形式>

2Lサイズのカラープリントを、

A4の台紙に貼り、

写真の下に100字程度の説明をつけ、

（1.撮影場所 2.その街並が上の三つのうちどれに属するのか、またその理由）

クリアファイルに入れる。

提出日：10月1日（月） 3階教員室まで

<課題のポイント>

前期はスナップショットという身体感覚に根ざした撮影方法を試みました。それはある意味で情緒的な写真を撮ることでもありました。後期は「考えて撮る」という撮影方法について試みません。かっこ良く言えば「コンセプチュアルに撮る」と言えるでしょうか。

この課題では、ある事実を伝える手段としてカメラを使ってみます。美しいとか醜いとか、主観的なものを客観的に伝える。その写真を見た人が美しいと感じる必要はありません。大切なのは、その風景をきっちり写すことです。写真を見た人がその場をリアルに感じられるように撮ってください。映像の中に自分の感情を込める必要はありません。

人によって違いはあると思いますが、例えば「好きな街並み」は、50年後100年後に残しておきたい風景とか、もっと増えてほしい空間、懐かしい記憶を呼び起こす場所などが考えられるでしょう。「嫌いな街並み」は目障りな場所や居心地の悪い空間などでしょうか。

「無関心な街並み」ですが、これは竹内万里子氏の名言、「好きの反対は嫌いではありません、無関心です」にヒントを得ています。いままで自分がまったく注意を向けていなかった空間に向けてシャッターを切ってみてください。注意を向けた瞬間にそれは無関心ではなくなるかもしれませんが、とりあえず「無関心」の項目に入れて下さい。

8期生みんなの写真が集まった時、東京の“今”がきっと見えて来ると思います。

<注意事項>

撮影対象は公共空間に限ります。

今回の課題について、少し専門的な研究者の見地から、補足してほしいと鷹野先生。そこで以下、雑ばくながら若干の解説をする。

「東京の景観を考える」。これ本当ですか？ というほど深くて大きいテーマである。子供からお年寄りまで、外国人から100年後の人々まで誰でも楽しめるものにできそう。だから、出題に対して、いろいろな人が様々な可能性を議論したり、提示できる方が、こうしたテーマにはふさわしい。撮られた写真をもとに議論やプロジェクト自体を継続することも可能だろう。そこで一応都市研究者のハシクレとして、私も多少の付け加えをできないかと考えた。

まずは、参考文献を紹介しようと思って、本をいくつか選んだが（別途示しますが）、それが出題意図に即して適切かどうか確信がもてない。そこで、今回の出題の意図を自分なりに解釈しようと以下を書き始めたが、もはや時間がなくなかなかかわらず、あとからあとから書きたいことが出てきてしまった。長くなりそうで收拾がつかない。そこでこのプリントは、第一弾ということにして、以後web上で補足することにする。

step21.jp/in_tokyo/

文献情報もそこに載せることにした。でもどのくらいの頻度で更新できるかは定かではないのですが。

出題の意図を読んで

さて出題の意図を見ると、写真を撮ろうとして注目するものがあつたとしても、「毎日写真」で目指したように、とにかく反射的にばしゃばしゃと撮るばかりではなく、今度は考えて撮るべし、ということのようだ。「公共空間」というコトバもそこに付け加わっている。制約というほどでもないが、撮り方というか、撮る時の意識として、共通に認識しているような「街並みを撮る」という約束事を提示している。

それは周囲との関係から切り離そうと意識してフレーミングすることでなく、周囲との関係を画像上で説明可能な形で捉えるように意識してほしいということだ。そうすることで、全体の写真のトーンが比較的揃ってくる。全員の写真から「東京の今を見せる」ことを可能にしようとしているわけだ。

また、緩やかながらも撮る際の約束事を示していることには、サンプリングする、という意識があるからだと思う。30人の学生が、サンブラーとして、「東京の今」の標本を、各地から取ってきてほしいというわけだ。

3つのレベル

つまりこの課題は出題上すでに、以下の3つのレベルの枠組みが与えられていることになる。

レベル1：個々の写真

レベル2：各個人の提出する15枚による写真集として

レベル3：レベル2の総体としての全員の写真

まずは、「レベル1」の素材として、個々の写真がなければならぬのだが、そこで必要とされるのは、上で述べた「街並み」を撮るという意識。文中では、「レベル2」の15枚セレクトをどうするのか、ということについては、「好き」「嫌い」「無関心」を適宜混ぜるということ以外には特にふれられていない。さらに「レベル3」については、誰がどのように編集して「東京の今」を提示するのか、ということも現時点では明確ではない。しかしながら、レベル1の素材として、雄弁かつ魅力的な素材が集まれば、レベル2、レベル3においても、いろいろな展開がありえるだろう。展示、写真集、web上での展開など、他者を巻き込める、波及効果のあるような企画ができる。書かれたものや写真をみて何か口をはさまずにはいられなくなる人も多だろう。見せる相手を仮想して企画するのもよい。さしあたりはweb上で展開できると良いと思うがどうだろう。Websiteという場もまた東京のイメージを検証することを可能にしそうだ。

無意識マップのすすめ

出題でもうひとつ厄介なのは、「好き」「嫌い」「無意識」という設定である。「好き」「嫌い」は、それぞれ日常の空間の中で見付けることも可能である。問題は「無意識」である。これについては、みんないろいろな解釈をして臨むのがよいと思うが、一例として、いままでまったく意識に上らなかつた場所に行くというアプローチもある。ゲームのようだが、全く今まで聞いたこともない鉄道路線、駅名や地名を探して、そこに行つて写真を撮るというのも、広い東京ならば可能である。東京全体の地図をにらめっこして、良く行く場所、よく通る鉄道などを地図上に落とし込んでいくと、きっと空白地帯がいろいろなところに出てくるはずだ。

日常訪れる場所は、それぞれの行動パターンに依拠しているし、趣味や嗜好によって良く行く場所というのがそれぞれある。しかしそれは知らず知らずのうちに「決まり」となり、自分の意識の範囲を規定してしまっているわけだ。

だからその空白地帯はあなたの無意識を示した地図だと言える。それはあなたのみならず、周りのみんなにも共通した空白もあるのではないか。

強引に結論。東京の西にすむ人は東へ、東にすむ人は西へ行け。実はこれは都市論的にも、都市史的にも展開できるお題である。

（続く）